

鹿児島 NEWS WEB

「悪性骨腫瘍」 治験を開始 3年後の実用化 目指す 鹿児島大学

02月18日 16時14分



がん細胞を破壊する特殊なウイルスを使った遺伝子治療の研究を進めている鹿児島大学は、治療が難しい希少がんの「悪性骨腫瘍」について新たに治験を始めたと発表しました。

3年後の2025年にも国の承認を得て実用化を目指す考えです。

これは、鹿児島大学の小賤健一郎教授などが18日記者会見で発表したものです。

それによりますと、がん細胞に感染すると特異的に増殖して細胞を破壊する「腫瘍溶解性ウイルス」を活用し、骨のがんの「悪性骨腫瘍」の患者に対する治験をこのほど始めたということです。

「悪性骨腫瘍」は100万人に4人が発症すると言われる希少がんですが、有効な治療法はないとされています。

治験は鹿児島大学や国立がん研究センターなどで行われ、20人の患者に投与して効果をみたと、3年後の2025年にも国の承認を得て実用化を目指す方針です。

小賤教授は、かぜの症状などを引き起こすアデノウイルスの遺伝子を組み換えて開発した「腫瘍溶解性ウイルス」の研究を20年ほど前から進めていて、6年前に鹿児島大学が単独で実施した前段階の治験では、9人の患者のうち6人に効果が見られたということです。

正常な細胞に感染しても増殖せずに傷つけないことから安全性も高いとしていて、鹿児島大学は、ほかにもすい臓がんの患者に対する治験を進めています。

小賤教授は「治療薬の実用化を目指し、一刻も早く患者さんに届けたい」と話していました。